

特別支援学校高等部におけるICTを活用した国際交流体験学習

キーワード 特別支援教育・国際交流・ICT・高等部

学校名 滋賀大学教育学部附属特別支援学校

所在地 〒520-0002
滋賀県大津市際川三丁目9-1

ホームページ
アドレス <http://www.ft.shiga-u.ac.jp>

1. 研究の背景

本校では、チェンマイ大学の教員を招いて交流学习を行ったり、中国からの留学生を招いて本国の伝統料理を学んだりしながら、国際理解教育を進めてきた。ただし、生徒にとってはどれもイベント的な活動に留まり、国際的な視点に立った学びに継続して取り組むという点では、弱さが見られた。

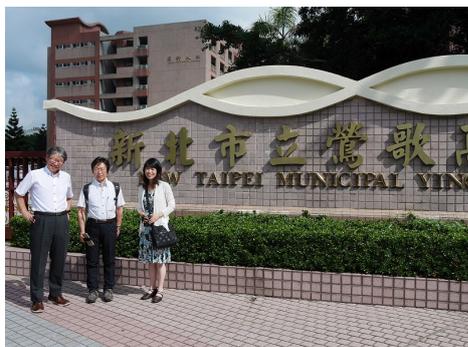
一方、ICT 環境については、平成27年度において大学の中期計画推進費により、各学部単位一人一台のタブレット端末が使用できる環境にある。学習グループによっては、それらを用いて就業体験の際、卒業生からアドバイスをもらったり、近隣の附属学校とのスポーツ交流に先立ち、テレビ電話で交流したりしている。

2. 研究の目的

これまで、教員レベルでの交流があった台湾新北市鶯歌高級職業高校（以下鶯歌高職と略記）の生徒と本校の生徒間で、インターネットを利用したテレビ電話を活用した交流を図る。

交流の内容は陶工、音楽、美術、調理、栽培など日常の学習活動を題材とし、互いの取り組みを紹介し合ったり、クイズ形式で出題し合ったりする活動を通して、生徒がグローバルな視点で互いを理解し合ったり、自主的にコミュニケーションを図ろうとできたりするように、取り組みを進めていきたい。

また、教員同士の交流も同時に進めていくことで、教員一人ひとりが今後 ICT を活用した国際理解教育を推進していく力量を高めることもねらいとする。



3. 研究の経過

鶯歌高職は生徒数2, 295名の大規模校であり、特別支援学級は各学年15名2クラス編成となっている。本研究を進めるにあたり、交流開始および終了の節目には、両校教員が相互訪問を行うとともに、テレビ電話による継続的な打ち合わせや情報交換を行った。

交流の年間計画は以下のとおりである。

1回目の交流 (5月30日)	グループにより、授業風景の交流、ネット上掲示板によるクイズ交流、ならびに教員同士による交流を行った。	教員3名の留学生1名(通訳)が鶯歌高職を訪問し、打ち合わせとともに、現地から交流に参加した。
2回目の交流 (11月22日)	グループでのネット上掲示板によるクイズ交流の後、全員で互いの行事を映像で紹介しあい、感想を交流した。	本校からは文化祭りハーサル、鶯歌高職からはダンスコンクールの映像を紹介しあった。
3回目の交流 (1月23日)	交流の日に向けて、美術作品を共同制作し、当日は鶯歌高職の教員2名を招いて披露した。	共同制作は壁画とし、互いの国の特徴的な絵柄の布地をベースに、互いの文化を紹介しあう作品となった。

なお、ICTに関わってはiPadのFace Timeなどテレビ電話機能の生徒間コミュニケーションツールとしての有効性、ネット上掲示板(Kahoot!)によるゲーム的要素のある学習支援ツールの有効性、生徒間コミュニケーションを進めるにあたり画像や映像に限定された交流の有効性などについて検証していく。



4. 代表的な実践

2回目の交流(11月22日)でのネット上掲示板を利用したクイズ交流を取り上げる。

事前打ち合わせ(11月14日)の前後にクイズやアンケートを日本語と中国語で作成し、相互でシェアした。

当日、本校はノートPCとiPadをそれぞれ2台の電子黒板につないでディスプレイとした。鶯歌高職もノートPCとiPadを教室前後4台のプロジェクターにつないで表示した。

ノートPC同士はskypeで通信し、本校から画像共有を行うことで、本校のPC画面が両校のディスプレイに表示された。この画面は主にネット掲示板の視聴に用いた。

そして、iPad同士はFace Timeで通信し、生徒間感想の交流に用いた。

実際の通信場面では、Face Timeはセキュリティの関係で大学のLanではつながらず、ノートPCは携帯電話のデザリング機能を、iPadは無線ルーターを使い、それぞれネット接続を行った。途中何度かFace Timeの通信が途切れたが、ノートPCのSkypeに切り替え、その間にFace Timeを復旧するやり方で乗り越えた。

結果的に、Skype と Face Time を別系統の無線 LAN に接続することで、バックアップ体制を整えたことが功を奏する形となった。

ネット掲示板 (Kahoot!) に参加する生徒には一人一台の iPad を用意した。こちらはネット通信を行うのみなので、大学の無線 LAN に接続した。

試行錯誤があった中だが、今回の環境設定の形により、一つの有効な通信モデルができあがったものと考えている。



クイズ交流で出し合った問題を抜粋して紹介する。

	問題文	回答
問題①	オアジェンは台湾の夜市で人気のメニューです。この中に入っていない食材は次のどれ？	カキ、○アサリ、野菜、卵
問題②	次のにんじんの飾り切りでおせち料理でよく使うのは次のどれ？	蝶、もみじ、○絵馬、いちょう
問題⑤	ジンジャーマトは夏バテ防止に良い食べ物です。最も人気のあるのは台湾のどのあたり？	北部、東部、○南部、中部
問題⑥	和食の日は何日？	1月24日、10月24日、○11月24日、12月24日

ネット掲示板 (Kahoot!) の性質上、回答は選択肢となり、早押しの要素も入って順位が表示されることとなる。

台湾の問題5問、日本の問題5問を交互に出題し、問題と選択肢については中国語、日本語の順に並べて表示するとともに、ヒントとなる画像も示した。台湾の問題は気候風土や伝統に関する食文化、日本の問題は和食文化に関する問題が出され、生徒たちが互いの文化の違いや共通点を学べる機会となった。

後半は、お互いに相手校も含めた生徒を対象とした質問を考え、それをアンケート形式にまとめ、ともに回答しながら交流を進めた。台湾からは以下のアンケート項目があがった (抜粋)。

	アンケート文	回答
アンケート①	次は台湾で人気の飲み物です。一番飲んでみたいのは次のどれ？	紅茶フロート、マンゴスムージー、タピオカミルクティー、ウーロン緑茶
アンケート②	台湾の生徒たちに最もおすすめしたい日本食は次のどれ？	お好み焼き、天ぷら、たこ焼き、お寿司
アンケート⑤	どのような朝ごはんを食べていますか？	ライス、麺類、パン、サンドイッチ類

結果、アンケート①では紅茶フロートとタピオカミルクティーが人気を二分、アンケート②ではお寿司に人気が集集中、アンケート⑤ではライスとパンが半々ぐらいとなった。

本校生徒の回答に対しては、Skype や Face Time を通して、鶯歌高職の生徒から、「やっぱりなあ」「意外

だなあ」という反応が伝わってきた。遠く離れた会場が一体感に包まれた感じとなった。

日本からは以下のアンケート項目をあがった（抜粋）。

	アンケート文	回答
アンケート⑥	次の日本食で一番食べてみたいのはどれ？	寿司、天ぷら、すき焼き、和菓子
アンケート⑧	魚の調理法で一番好きなのは次のどれ？	焼き魚、さしみ、煮魚、魚フライ
アンケート⑩	台湾のコンビニでも買うことのできる次の日本のスナック菓子で一番食べたいのは次のどれ？	カラムーチョ、ポテトチップス、ぷっちょ、コロロ

結果、アンケート⑥ではお寿司に人気集中、アンケート⑧では本校で回答が分散、台湾ではさしみに集中、アンケート⑩では本校で回答が分散、台湾でカラムーチョに集中となった。

質問の回答の一つ一つに対して自然なアクションのやり取りがあり、臨場感のある交流となった。



5. 研究の成果

教員打ち合わせ、生徒同士の1対1、1対集団におけるテレビ電話（Face Time、LINE ビデオ）は、どちらの有効であった。

ネット接続とディスプレイ接続を Wi-Fi と Bluetooth によりともに無線でつなぐことで、iPad を持って生徒に近づきインタビューすることが可能となった。それでも一度目の交流では接続が一時不安定となったので、二度目の交流では iPad を三脚に固定し電子黒板とアダプタを通して HDMI ケーブルで接続、その上で Wi-Fi ルーターでネットに接続した。

この接続方法は安定していたが、それでも一時不通になることがあり、画面共有のため接続していた Skype をテレビ電話のバックアップとして活用した。今後も、複数回線接続して交流活動を行い、常に安定している方を選択しながら、円滑に交流を進めていくことが望ましいと考えている。

教員の打ち合わせにおいても、テレビ電話は最終的な合意や意思決定を行う際のツールとして機能した。細かい内容や時間の流れなど正確さが求められる打ち合わせは文字情報でのやり取りが向いている。しかし、複数の選択肢がある中で方向性を決め意思決定を行う上では、ネットを介してとはいえ face to face のやり取りを行うことで息のあったコミュニケーションが可能となった。

ネット掲示板（Kahoot!）でのクイズ交流については、日本と台湾という遠く離れた会場で、クイズやアン

ケートをともに楽しめたことが、一つの経験を共有できたという貴重な成果となった。進行役の教員と通訳は鶯歌高職訪問時も現地で進行役を務めたが、どちらでも同じような臨場感を感じながら交流を進めることができたと振り返っている。国際交流という場で相互理解を深めるツールとしても大変有効であった。

最後に行った3回目の交流（1月23日）は、鶯歌高職の教員2名と本校生徒の交流となった（鶯歌高職の生徒とは共同作品制作を通して交流した）。

完成した共同作品（壁画）に表現された、それぞれの国の文化や伝統について、相互に伝え合う時間をとった。その終わりがけに、日頃自分から意見を伝えることの少ない生徒が挙手し、壁画に表された日本（滋賀）の文化についての説明を始めた。

その姿に、写真や映像を通じてではあるが、年間を通じて相手の顔が見える形で交流を積み上げてきた成果が見える気がした。



6. 今後の課題・展望

小関和也は、「グローバルなものの見方」について次のように指摘している。地球全体を自分も含めた一つのシステムとして捉えること、国ではなく活動主体のつながりを重視すること、自らの利益ではなく地球市民の発想から物事を判断することである。

今回の交流だけを通して、互いの生徒たちの中にそういったグローバルな見方が育ったかといえば心もとない。ただ、特別支援学校の教員同士、生徒同士が一人一ひとり主体となって交流し、友好の輪を広げ、主体と主体のつながりを実感していくことは極めて重要なことであると考えている。今回の交流もそうした取り組みの確実な一歩となったことを確信している。

清水和久らは、国際交流学習41事例を分析し、次の4つの類型に分類している。「協同的交流型」は綿密な打ち合わせにより学習活動や成果について共通理解を得て協同性も高い交流学習、「交流重視型」は通信手段などの制約により相互に協同的な活動に取り組むことはしていないが綿密な打ち合わせにより学習活動についての共通理解が得られている交流活動、「場利用型」は交流の機会は設けられているが質問と回答のやり取りに留まる交流学習、そして交流によってどのような成果を協同でしあげるかというゴールは明確であるがいつどのような活動を行うかについては大まかな枠組みだけを共有して比較的自由に柔軟に展開する交流学習である。

この分類に照らすと特に2回目の交流では綿密な打ち合わせを行い、前述のとおりネット掲示板でのクイズやアンケートを通して、協同的に交流を展開することができた。その意味で、「協同的交流型」の交流が実現できたといえる。

テレビ電話を利用した交流の成果は、先に述べた通りである。一方、今回の交流では本校の半数以上の生徒がテレビ電話を通じて会話できたが、全員経験できるまでには至っていない。会話ができたとしても緊張のためうまく話せない生徒や、活動への見通し（実感）が持ちにくく参加そのものが難しい生徒もいた。

今後は、実際に出会ったり互いの作品に触れたり食文化を味わったりする活動と、ICTを利用した交流を有機的に結合させて取り組むことで、互いの生徒にとってより実感を伴った交流活動を展開していくようにしたい。

7. おわりに

今回の研究を通しては残された課題を含めてではあるが、全体として ICT を活用して国際交流体験学習を展開する上での一つのモデルとなる実践を示せたと考えている。今後はこのモデルの深化発展に取り組みながら繰り返しの交流を展開することにより、生徒の学びの質を確実に深めていくことが求められる。

今回の研究を進めるにあたっては目的や目標を明確に持ってスタートしたものの実際交流を進めていくと、何をやるのかいつするのかという行事のすり合わせに終始してしまうことが起こった。交流活動のモデルが一定明らかになった今こそ、何のために交流をするのか交流を通して生徒たちにどんな力をつけていくのかを再考し、教育課程上への位置づけも含めて検討していくことが必要となっている。

今回の交流を通して、互いの学校の行事や取り組みの情報を交換するために、共有アルバムのアプリ「みてね」を利用した。3回の交流を終えた今でも、新しい取り組みがあると双方から情報をアップし、感想を交換するやりとりが続いている。無理なく、情報交流を進めることで、互いの文化への関心と親愛の気持ちを継続して持ち続けることができれば幸いに思っている。



8. 参考文献

- ・小関一也 (2011)「多元性・多層性から読み解くグローバルシティズンシップ」『国際理解教育』17.明石書店
- ・清水和久、益子典文 (2009)「小学校における『自律型国際交流学習』の特長とそのデザイン」『岐阜大学カリキュラム開発研究』21.pp.90-99